意見交換

日本現代女性史の課題と展望

―『全国女性史研究交流の集い in 奈良』から浮かび上がったもの―

加納実紀代・平井和子・藤目ゆき

藤目　『全国女性史交流のつどい in 奈良』[1] から、ちょうど1年が経ちました。この集いには長い歴史があり、日本で女性史に関心を持つ仲間が全国から集まる貴重な機会になっています。昨年の「つどい in 奈良」には、アジア現代女性史研究会からも参加しました。そこで『アジア現代女性史』上にもこの集いの成果を報告したいと考えました。

とはいえ「つどい in 奈良」で発表された諸報告や発言は、すでに、主宰者の奈良女性史研究会がきちんと報告書[2] をまとめられています。それで、ここでは日本現代女性史の課題と展望に関して「つどい in 奈良」から浮かび上がってきた重要な諸要素を紹介したいと思い、この集いに参加された加納実紀代さんと平井和子さんに協力をお願いしました。

神奈川から新潟へ　そして奈良へ

藤目　加納さんはこれまで女性史の新しい流れを創り出すために大きな力を発揮されてきました。それで最初に加納さんにこれまでの流れをお話しして頂けたら、と思うのですが。

加納　「全国女性史研究交流のつどい」は 1977 年の愛知大会以来全国持ち回りで開かれ、昨年の奈良が第10回だったわけですが、私が参加したのは1998年に神奈川で開かれた第8回からです。私は「銃後史」と称して戦時期の女性の戦争協力に焦点をしぼって研究してきましたので、ちょっと視点が違うような気がしてそれまでは参加していませんでした。

第 8 回の神奈川大会は地元でもあり、神奈川女性史の編纂でともに苦労した江刺昭子さんが中心になってやろうというので、それじゃあということで実行委員になりました。

その時こだわったのは「現在からの発想」ということです。歴史をただ過去から現在への時の流れでみるのではなく、まず「現在」の問題を考える。20 世紀末の現在、日本の女たちはどういう状況

1 「第 10 回全国女性史研究交流のつどい in 奈良」は、2005 年 9 月 3 日・4 日の両日、「歴史に学び、未来を拓く　平和と平等を創るために、今、女性史に問う」を合い言葉に、奈良市で開催された。北は北海道から南は沖縄まで、女性史に関心を寄せる約 430 人の人々が全国から参加した。参加者の圧倒的多数は女性で、大学などの研究機関に在籍することなく、地域で女性史のサークル活動に取り組んできた人が多い。日本における「女性史」研究は、アカデミズムの世界よりも、草の根の女性たちの活動に支えられて発展してきた。

2 『第 10 回全国女性史研究交流のつどい in 奈良―歴史に学び、未来を拓く　平和と人権の確立にむけて歴史認識の共有を！報告集』2006 年 3 月 31 日、第 10 回全国女性史研究交流のつどい実行委員会編集発行、全 148 頁。

にあるのか、どんな問題をかかえているのか。それを洗い出してテーマを立て、分科会を設定して現状と歴史的背景について検討する。

こう考えた背景には、女性史と女性学の結合をはかりたいという「野望」がありました。女性史の研究者には、女性学に対するうさんくさいまなざしがありますよね。女性史はずっとこつこつ努力してきたのに、あとからきた女性学が横文字ひけらかして大きな顔をする、といった…。それはよくわかるんです。女性史研究者はほんとうにポスト的にも報われていませんから。

藤目　女性史の業界にはたしかにそういう閉塞的な面があるし、女性学と女性史のあいだの対立みたいなものがありますね。

加納　でもそうした対立はお互いに不幸だと思う。私は女性学を、既成の学問すべてを女性の視点で問い直す学際的な学問だと思っているので、これまでの his-story を女性の視点で見直す女性史は女性学の一環と思っています。でもそれを言うと女性史の人たちから猛反発される。神奈川の実行委員会でもそうでした。結果的にはシンポジストに上野千鶴子さんと安丸良夫さんをお願いし、９つの分科会の一つとして「性」の分科会を設定できたので、私の「野望」も少しはかなえられたといえるかな。

「性」分科会では、「基地」と「セックス・ワーカー」、「慰安婦」の３つの柱を立てました。神奈川は沖縄に次ぐ基地県です。神奈川でつどいを開催するからには、基地売春の問題をぜひ取り上げたい。研究チームを作って占領下の横浜・横須賀の状況を調べるとともに、すでに御殿場について実績を上げている平井さんに報告をお願いしました。体調が悪くてけっきょくテープでの報告になってしまいましたが、おかげで研究の視点や方法など得るところが大きかったと思います。

セックス・ワーカー問題は、藤目さんの『性の歴史学』に触発されてのものです。それまでは「売春」を「醜業」視して、そこで働く女性を道徳的に劣った存在、あるいはかわいそうな女性として救済の対象にしていたわけですが、セックス・ワーカー論は彼女たちを働く女性、権利の主体とする視点を開いた。それは現在日本の性産業で働くアジア女性の人権を守る上で重要なパラダイムチェンジだったと思います。藤目さんに報告をお願いしましたが、ご都合がつかなくて残念でした。

「慰安婦」問題は実証研究というよりは、「なぜ日本の女性史は、慰安婦制度の実態解明をしてこなかったのか」をテーマにしました。それこそが日本女性史の現在的課題だと思ったからです。ここでは報告者の金富子さんから、日本の女性史研究者の一国主義を厳しく指摘されました。

第９回の新潟大会はその流れです。

藤目　私は学生時代から全国女性史交流の集いに関心があって、いつも報告だけは読んだり聞いたりしていましたが、実際に参加したのは新潟が最初でした。女性史業界のなかにも新しい風が吹いてきていると実感し、とても元気づけられました。

加納　新潟女性史クラブの方々の努力で開催出来たのですが、たまたま私が 2002 年から新潟の大学で教えることになったので、話し合った結果未決の女性史の課題として占領下の「性」の問題をとりあげることになりました。藤目さんにシンポジストをお願いして、今度は実現できました。平井さんにもお願いしたのに、またまた体調が悪くてだめでしたね。だから去年、奈良でお元気な報告をうかがったときはほんとうに感無量でした。

新潟のつどいでは、参加者に対して RAA や基地売春について調査研究を呼びかけました。神奈川の性分科会で、鳥取から参加した女性が、かつてそうした所で働いた女性が近所にいて孤独な老後を

送っている、彼女たちの体験をこのまま埋もれさせていいのかと発言されたのが心に残っていたからです。当事者の声をきちんと聞き取るにはもう遅すぎるかもしれないが、でもまだ間に合うかもしれない、最後の機会ではないかと思いました。

もう一つ、新潟では新しい試みがありました。これまでの集いでは、各地域女性史がそれぞれの地域について研究発表をする。相互の関連はなかったのですが、新潟では「女工」について、送り出した農村側と受け入れた都市側の地域女性史が共同研究して発表しました。これはすばらしいことです。RAAや基地売春についても、各地域の研究を持ち寄ることで実態の解明がすすむのではないだろうか。

その結果が昨年の奈良での「基地と女性」の分科会です。そこでは平井さんの熱海についての報告をはじめ、新潟、神奈川、奈良、佐世保から研究報告がなされました。おこがましいいい方ですが、神奈川以来の私の思いが共有された、と胸が熱くなりました。

藤目　平井さんはいかがでしたか？　平井さんは静岡県をフィールドとして占領下の女性史の実証研究にパイオニア的な仕事をしてこられたわけですが…。

平井　加納さんの「現在からの発想」ということにとても共感します。

私が占領下の基地売春の研究をはじめたきっかけは、1992年、沖縄県での第5回大会に参加したとき、全体会でフロアーから若い男性が、「今、従軍慰安婦問題について、上坂冬子さんなどが必要悪であったという発言をしているが、女性史をやる皆さんはどのように考え、行動されるのか？」という問いかけをされたことが一つです。その場では打てば響くような各地での取り組みや反論が出されなかったことに[3]、女性史研究者の端くれとして胸が痛んだという苦い思い出です。このとき、沖縄の方々は「慰安所マップ」を共同でつくって提示されました（「戦争と女性－『慰安所マップ』が語るもの」第1分科会メンバー、1992）が、「本土」のわたし達はどうなのか？とも自問しました。

それでまず、自分の住んでいる場所から、「基地と女性」「占領と女性」という重たいテーマに取り組むことによって、わたしなりに沖縄の女性たちに連帯したい、そしてフロアーから質問された方へ応答をしたいと思ったのです。

その後、神奈川で加納さんが取り掛かりをつくられ、新潟から奈良へと実証的研究が広がり、この第5回の沖縄大会に対する応答が、十数年の時を経て「本土」からなされようとしているという気がして、これはわたしの勝手な解釈ですが、この間の「つどい」の流れに感動しています。

対「テロ」戦争と日本女性史

平井　もう一つ、2001年11月に藤目さんが中心となって呼び掛けられ、京都で開かれた「軍事基地と女性」集会の体験[4]が、今回の「つどいin奈良」に流れ込んでいると感じています。この年は日米安保50年、9・11の「米国同時多発テロ事件」を発端にアフガニスタンへの攻撃が開始された年でもあり、何とか東アジアから非軍事の波をつくりたいという思いで、「女性がつなぐ、韓国・沖縄・『本

3　もちろんこの時点で、女性史研究者による日本軍「慰安婦」問題への取り組みは着手されつつあった。が、この場で「必要悪論」への反論はだされなかった。このような時代性をおびた「一般の人の関心事」に遅滞なく研究の成果を提示することと、運動との結びつきの重要性は、その後の「つくる会」歴史教科書問題でも浮かび上がった、歴史学全体の課題であると思う。

4　詳しくは『東アジアの軍事基地と女性』「軍事基地と女性」集会報告集編集委員会 2002,3 参照

土』」を合い言葉に交流会が開かれました。

わたしはこの時、米軍基地を有する地域の女性たち・男性たちが、国境を超え、アクティヴィストも研究者も一緒に、学際的な対話ができたことに新たな可能性を感じました。この時、参加した人たちが、今回の「つどいin奈良」でも大きな役割を果たされました。大林美亀さんたちは「つどいin奈良」を開催する中心になられたし、鶴田律子さんもシンポジストとして発言されたり、活躍されましたね。

藤目　2001年の京都での集会は、私自身にも大きな励みになりました。この集会の参加者たちでその後「軍事基地と女性」ネットワークという会を作り、ゆるやかですが、連絡を保っていて、新しい仲間も増えてきました。その中のお一人が、「つどいin奈良」の「基地と女性」分科会で報告して下さった宮脇明子さんです。

ここに宮脇さんの御発言のメモがあります。近現代を通して軍港の街である佐世保に生まれ育ち、現在も軍港が窓から見えるお家にお住まいの高齢の方ですが、会場で御発言を聞いていて涙が出ました。こんなふうにおっしゃっていました。

「佐世保の場合は今も基地です。それで戦前の60年と戦後の60年、120年をまとめて軍事基地のもとでの女性の歩みということで、性暴力という観点から考えてきました。軍人の慰安婦にされた女性も、一般市民も、戦争があり軍事基地があったために、痛みがあり、それが倍増され、未来ある青少年にも影響がある。女性への人権侵害である性暴力に私たちは力を合わせて抗議して、そして心豊かな住みやすい街づくりをしたい」。

佐世保では近年も米兵のレイプ事件があり、宮脇さんたちのグループも抗議行動をなさったそうです。女性史の実証研究の進展が、たんに学問的に水準が高いというだけでなく、地域の女性たちの平和や人権への希求と結びついて実現してきたことが感動的でした。沖縄からの参加者が会場から「沖縄を忘れないで」と発言されたのも忘れられません。

平井さんはこの分科会で、イラク戦争に言及され、日本占領史を女性の視点から洗い直す必要があるということを指摘されましたね。とても重要な指摘だったと思います。

平井　ありがとうございます。この分科会で、各地から「米占領と女性たちへの抑圧」が具体的に報告されましたが、これらの研究を、現在展開されている英米を中心としたミリタリズム批判に繋げて考えなくてはいけない、それが「現実的課題に応える女性史」だ、という思いで発言しました。

先にも触れましたが、アメリカのブッシュ大統領が、2001年のアフガンや2003年のイラク攻撃・占領に際して、戦争目的を肯定化させるために、こともあろうに成功例として「日本モデル」を引き合いに出しました。また、「アフガンの女性、子どもたちは、十分苦しんだ。われわれの偉大な国アメリカが、救済し、希望を与える」という彼の演説に見られるように、戦争目的に「女性救済」を掲げるという事態に、日本の女性史研究者の一人として、これは座視できないと思いました。

もちろん、ベトナム戦争の記憶ではなく、恣意的に60年前の日本占領を例に出すというこの悪質な歴史の横領に対して、日米の占領史研究者が抗議の「声明」(2003/1)を出しました。が、私は、この男性研究者を中心にまとめられた「声明」が前提とする枠組み[5]だけでは、ミニタリズムとセットになった「ブッシュ型女性解放論」への批判にはなりえないと思いました。占領期研究者のなかにも、ジェンダーの縛りは存在します。男性研究者の多くが見過ごしてきた、勝者ー敗者の男性間で取

5　2003,3に雑誌『世界』に掲載された、ブッシュ政権のイラク攻撃に反対する日米豪の日本占領史研究者24人の声明。「イラク戦争・占領は歴史を無視する計画である」と非難したが、日本占領は「成功」とする認識は共有されている。

引された女性の側の視点からの問い直し、これが日本女性史の取り組むべき役割だと思います。

藤目　従来の日本占領史研究には性暴力被害を被った女性の経験が捨象されてきた、ということですね。

平井　そうです。「平和的進駐」という表現ひとつとっても、なるほど「米軍への組織的テロは皆無」[6]だったかもしれませんが、女性への暴力（レイプや「慰安」提供という名の買売春・性的管理など）は多発したわけです。これで「平和的」と言えるのかどうか。

いま、イラクやアフガンで何が起こっているか気がかりです。東京に来て報告されたイラクの女性は「占領が始まってから起きていることがある。女性や子どもを拉致して暴行する。そして国外で女性を売買している。イラクではそれまで知りもしなかったことだ」（ハナ・イブラヒム「占領下イラクで何が起こったか？！」2005,8/12）と言っています。

わたしたち日本の女性史も、隠蔽されエピソードとしてしか語られることのなかった、被占領地の女性たちの体験や語りに意味を与え、従来とは違った日本占領の実態を明らかにすることによって、今も続くアメリカの世界戦略の問題性を浮かび上がらせることが出来ると思うのです。それはトランスナショナルな女性たちの結びつきによって可能になります。その点でも、このアジア現代女性史研究会の取り組みは重要だと期待しています。

藤目　平井さんが「つどいin奈良」で、「従来の日本占領史で女性問題が抜け落ちてきたことが、日本占領という成功例があるとイラク占領を合理化する論理を許してきた」といった趣旨の発言をなさったとき、感激しました。よくぞ言って下さいました、というか（笑）。

「現実の課題にこたえる女性史を」というのは、女性史に対する平井さんの一貫した御姿勢ですね。以前、その題で論文を発表されましたね[7]。その当時「従軍慰安婦」問題が国際問題化しつつあったけれど、鈴木裕子さんは特別で、一般の女性史関係者の反応は必ずしも積極的なものばかりではなかった。その平井さんの論文に出会い、本当に良いことを言って下さったと感激したのですが、奈良での御発言を聞いて、そのときの感激を思い出しました。平井さんのおっしゃる「現実の課題にこたえる女性史を」というのは、加納さんがさきほどおっしゃった、「現在からの発想」ということと共通していると思います。

アフガニスタンやイラクを米軍が攻撃し、それに日本が加担し自衛隊まで派兵しているという、それこそ「現実の課題」に対して、それに応える女性史、少なくとも、応えようとする女性史研究とそのための視点が必要だと思います。

日本占領は、イラク占領と類型的に比較されるという要素と同時に、占領状態を利用して米軍が日本を全面的に朝鮮戦争遂行の基地にした、という要素もありますよね。仮に性暴力被害女性が日本国内にいなかったとしても、少なくとも日本占領米軍が南北朝鮮の人々に対する軍事攻撃の格好の基地にした事実ははっきりしているはず。でも、それも日本女性史のなかでの研究は立ち後れています。

平井　藤目さんが以前、『国連軍の犯罪－民衆・女性から見た朝鮮戦争』（不二出版、2000）という編集復刻の本を出版されていましたね。これは、私も全く知らなかったのですが、朝鮮戦争中に17カ国の代表からなるNGOの女性調査団を朝鮮へ派遣している。そして、女性への暴力（レイプや米軍が朝

6　ジョン・ダワーの発言。彼は新聞のインタヴューで「日本占領はなぜあれほど平和的だったのか」「なぜ成功したのか」という問いを立てる。（『朝日新聞』2005.7.25）

7　「現実的課題に応える女性史を－従軍慰安婦問題をめぐって－」『歴史評論』1993,10

鮮人女性を「慰安婦」化していることなど）を含めて国連軍の非人道的行為を事細かに報告しています。同時代に国境を超えた女性たちの連帯があったことに感動しますし、その報告は非常に今日的意味をもっていると思います。
ちょうど、この年の1月、両院に憲法調査会が設置され、「国際貢献」の名のもと、国連へ軍隊を派遣できる「普通の国」に向けての動きが加速されようとしている時だったので、国連軍の実態がこれによって広く知られるようになればいいな、と。非常にタイムリーなお仕事だと思いました。

藤目　そうですね、『国連軍の犯罪』は2000年に出したのですが、それ以後、とくに最近、軍事的緊張が急速に高まっているだけに、日米韓軍事同盟の枠組みから離れて、朝鮮戦争という終わらざる戦争に対する歴史認識を確立してゆく必要があると痛感します。

加納　私はこの8月に北朝鮮を訪問し、祖国解放戦争勝利記念館を見学したのですが、そこでは朝鮮戦争下の国連軍の犯罪が写真や資料で展示されていました。じつは藤目さんの『国連軍の犯罪』はつい最近知ったのですが、ほんとうに貴重なお仕事だと思います。これが戦後史のなかで抹殺されてきたのは、まずは占領軍による言論弾圧の結果ですね。

「戦後」の戦争と複合差別

藤目　日本が侵略する側に立ち、女性が再び銃後に動員されつつあるのではないか。その問いを女性史のアプローチで最初に発してくださったのが加納さんだったわけですが・・・。

加納　わたしは1970年代初めから仲間たちとともに，女性の戦争協力の実態をしらべて機関誌『銃後史ノート』にまとめてきました。「銃後」という言葉は戦争の後方支援活動を意味しますから1945年で終わるはずですが，1986年からはひきつづき戦後の女性の歴史を辿り『銃後史ノート・戦後篇』にまとめてきました。「男は前線・女は銃後」という構造は戦後も変わらないと思ったからです。直接武力は使わないが，戦後日本はアジアに経済侵略して，その先兵たちの銃後を女が支えている。

藤目　それですね、そのような戦後日本に対する見地、第二次大戦後のアジアと日本の関係に対する基本的な見地がないと、「戦争」や「銃後」の話題は1945年で終わってしまうのだと思います。
「つどいin奈良」の主宰者たちの基調は、「一国主義」と「複合差別」を批判的に検証しようということにありました。性・階級・民族といった複合的な女性抑圧構造を解明せず「日本」の「日本人女性」のことだけを見ていては真の日本女性史は書けない、という問題意識です。それは、アジア現代女性史研究会に共通する問題意識です。
　が、集いの参加者の中にはそういった基調になじまない人、もしかしたら反感を抱いた人もいたかもしれません（笑）。日本女性史叙述の一国主義的視野狭窄を危惧している人が多数いるとはいえませんから。
　本号はベトナム戦争特集号なのですが、編集をしながらその思いを強めました。ベトナム戦争は周知の通り、アジア全体を巻き込みアジア各地の女性たちにも直接間接に大きな影響を与えました。祖国が戦場となったベトナムはもとより、韓国においてもユン・ジュンオク先生たちのような主体的にベトナム戦争を見つめている女性たちがおられます。それに対して、日本ではいかにこの戦争が女性

史のなかで扱われてこなかったかを再確認したのです。サイゴン政権とのみ結んだ賠償協定、ベトナム戦争中の対米協力、ベトナム統一後の米国が主導するベトナム孤立化への加担といったことが日本女性史の課題として意識されたことは稀であり、ベトナム戦争時代に反戦活動をした日本の女性運動に関してさえ、まとまった叙述がありません。無い袖は振れないので、第３号に「ベトナム戦争と日本女性史」という実証的な論文を掲載することは断念せざるをえませんでした。

けれども、今後、日本女性史の中にベトナム戦争を視野にいれた研究が進む必要があると思うのです。それはたんに「他国の女性のことも」研究するということではなく、自分が生き暮らしている日本とは何であるのか、自分はどこにいるのか、という自分自身を認識することだからです。

集いのなかで、「戦争と平和」という分科会がありましたね。加納さんはそちらにも参加されたのですね。

加納　奈良のつどいは、わたしは一参加者で全体はわからないのですが、参加した「戦争と平和」分科会で新しい試みがありました。「戦争の記憶」の検証です。

80年代後半から各地で地方自治体による地域女性史が出されはじめましたが、そのなかには戦争体験が集積されています。それは戦後40年以上経った時点での「戦争の記憶」です。日本の女性たちはあの戦争をどう記憶しているか？　一口で言えば被害者として、ということです。それはなぜなのか、どうすればそこから脱却できるのか、という視点から報告がなされました。これは戦後６０年ならではの画期的な試みだと思います。もちろん戦争体験の掘り起こし・聞き取りはまだまだ必要ですが，それだけでなく戦争の記憶とその語られ方への視点をきちんと持つ必要がある。

それと同時に、「戦後」に埋めこまれた「戦争」をどう可視化するかが，今後の日本女性史の課題ではないかと思いました。日本では「戦争」は1945年に敗戦で終わった、あとは平和な「戦後」ということになっている。しかし世界ではずっと戦争はつづいていて日本も無関係ではない。とくに朝鮮戦争、ベトナム戦争では日本はアメリカに協力して大もうけした。あの無惨な敗戦にも関わらず世界に冠たる経済大国になったのは、そのお陰といえます。

それに無自覚で、「戦後」と言ってきたことそのものの中に、現在の「戦前」状況を生む大きな要因があったのではないか？　女性史も同様で、戦争といえばアジア太平洋戦争，そして「戦後の民主主義と平和を守れ」路線です。藤目さんが、ベトナム戦争について女性史の研究がないといわれましたが、朝鮮戦争についてもそうです。それはまさに日本女性史の「一国主義的視野狭窄」にほかなりませんが、研究者だけでなく日本人全体の無自覚さの結果だと思うんです。それを可視化する方法はないものか・・・。

藤目さんが「ない袖は触れない」とおっしゃったのですが、それでいえば、「ない袖を振る」というか、「無自覚さ」「不在」を明らかにする女性史の方法はどうあるべきかと考えたとき、この「アジア女性史」まさにその問いに答えるものだと思います。

藤目　そう言っていただけると光栄です（笑）。アジア諸国の女性史は、これまで知りたいと思ってもあまり本も出ていないし、日本で研究している人も少ないのです。本号には片山須美子さんが寄稿して下さったのですが、片山さんのようにベトナム女性史に取り組んでいる人は日本にはほとんどいらっしゃいません。

加納　ただ、わたしは，日本女性史としてまだやれることをやっていないという思いがあります。日本女性史は「日本人」の女性史ではない。日本という「国家」の範囲で、「戦後」という時代を共有したのは「日

本人」だけではありません。

それをどうやって可視化するか。『銃後史ノート・戦後篇』をだすとき考えたのは、毎号必ず在日朝鮮女性と沖縄からの視点を入れるということでした。

それで朝鮮戦争当時の聞き取りをしたとき、在日女性たちがどんな思いで祖国の戦争を見ていたかを知って、ほんとうにショックでした。ある女性は、当時はまだ子供だったのですが、祖国への爆撃を何とか止めたいというので、雪の降る日に相模原の米軍基地まで歩いていって、フェンスの外から米軍機に向かって石を投げたというんですね。日本女性からは朝鮮特需で景気がよくなったといった話が多いのに。私自身もカネヘン景気に乗っかって屑鉄拾ってお小遣い稼ぎをしました。

同じ日本で同じ空気を吸いながら、こんなにも体験が違うんですね。それを日本女性史がどう可視化してゆくか。この『アジア女性史』はアジアからの視点を入れることによって日本女性史の一国主義を開く大きな役割を果たしている。しかし日本女性史が、在日朝鮮女性をはじめニューカマーの女性たちの体験をしっかり直視することができれば、日本の中から開かれるものも大きいのではないか。わたしはあるべき日本の未来を多文化共生社会と考えていますので、早急に取り組むべきだと思っています。

平井　重要な指摘だと思います。「日本人」の一国狭窄主義は、アジアという広がりと女性たちの連帯のなかで克服されていくと同時に、「日本のなかから開かれるものも大きい」ということですね。

その点に関連してちょっと飛躍するかもしれませんが、韓国をはじめアジアの「慰安婦」にされた女性たちや沖縄の女性たちの証言に頼る傾向が強い、９０年代以降の近現代女性史のあり方に、危うさのようなものを感じてきました。もちろん、闇の中に葬られてきたサバイバーの声を聞くという行為の大切さは強調してもしすぎることはないと思います。でも、なぜ自分たちの地域や「日本」のなかにも存在する重層的な女性たちの体験を浮かび上がらせることができないのか？或いは、サバイバーにさらに辛い証言をさせ続けるのか？つまり、悲惨な目にあった被害者の証言に寄りかかり続ける運動や研究に対する、ためらい。それは、私自身も含めて、どこかで傲慢さがあるような気がします。問題は、そのような女性たちを無自覚なまま踏み続けてきた、あるいはそのような構造を変えることができずにきた私たち自身の「戦後」の「加害性」に向き合えるのかどうか、だと思うのです。

藤目　女性史を日本の中から開く、あるいは、日本の中・自分の地域の中に存在する経験を浮かび上がらせるということ、お二人がおっしゃったことに同感です。それこそ日本女性史の日本女性史たる所以だと思います。

「つどいin奈良」の主宰者たちが「複合差別」というキーワードにこめた思いは、まさに日本女性史は「日本人」女性史ではないはず、意識的に在日朝鮮人女性を視野にふくむようにしたい、ということでした。基調提言の一つを在日女性にお願いしたのも、「複合差別」という分科会で在日女性からの報告や、日本側からもウトロの問題に取り組んできた地域女性史サークルからの報告が行われたのも、そういう思いからでした。

アジア現代女性史研究会も、在日朝鮮人やニューカマーの外国人女性たちと協同して女性史を書いていきたいと念願があり、滞日外国人の暮らすコミュニティーのフィールドワークに行ったりしています。『アジア現代女性史』でもいつか、滞日アジア女性の特集号を組みたいです。それに、加納さんにも平井さんにもどんどん論文を寄稿していただけたら嬉しいです。

今回の「鼎談」は、神奈川・静岡・大阪に住む三人が東京に集まって一泊し徹夜でおしゃべりし、

それから９月から10月にかけてメール上で意見交換をし、原稿を三人で編集するという斬新な試みでした。三人で会うのは、「つどいin奈良」からほぼ一年ぶりでした。

「つどいin奈良」は、全国に散らばっている女性史の仲間が一同に会することのできる貴重な機会でした。たいへんな努力によって集いを実現して下さった奈良女性史研究会のみなさんにあらためて御礼申し上げます。

資料

第10回　全国女性史研究交流のつどいin奈良

開催日：2005年9月3日～9月5日
会場：なら100年会館、あすらな・奈良市男女共同参画センター、三井ガーデンホテル奈良
主催：第10回全国女性史研究交流のつどい実行委員会
参加者数：420人

9月3日（土）
基調提言「戦争と差別のない未来へ　―奈良からの提言」
コーディネーター：藤目ゆき（大阪外国語大学）
提言者：鈴木知英子（かしば女性会議）
松谷操（部落解放同盟東之阪支部女性部）
李愛子（畝傍中学夜間学級生）
分科会Part 1　「戦争と平和A」「軍事基地と性暴力」「教育」「複合差別」

9月4日（日）
分科会Part 2　「社会参加・運動」「暮らし」「労働」「戦争と平和B」
シンポジウム「新たな女性史の視点で戦後60年を考える」
シンポジスト：志水紀代子（追手門学院大学）
鈴木裕子（女性史研究者）
鶴田律子（洛南女性史研究会）
コーディネーター：藤目ゆき（大阪外国語大学）

9月5日（月）
スタディー・ツアー
人権のふるさと御所市柏原「水平社博物館」見学とフィールドワーク
「薬師寺」見学（解説付き）と玄奘三蔵院・平山郁夫画伯壁画鑑賞

基調「戦争と差別のない未来へ－奈良からの提言－」

コーディネーターからの発言　藤目ゆき

「戦争と差別のない未来へ」。

この合い言葉が今ほど切実に感じられる時代はない。イラク戦争は「大量破壊兵器」廃棄なる大義名文が失われてもなお続き、無辜の民衆が大量破壊と大量殺戮の犠牲になっている。平和憲法を持つはずの日本では国民を戦争に動員する有事法が制定され、自衛隊の戦場派遣によって日本人はイラクのレジスタンスから敵視されるようになってしまった。NGOの活動者が人質にとられたり、現地を訪ねた若者が殺害されたが、本人と家族は同情よりも自己責任論やハラスメントに取り巻かれた。日本が参戦国家へと大きく舵をきる中で、草の根にファシズムが浸透し、抵抗する人々や立場の弱い人々に攻撃の矛先が向かっている。日の丸・君が代の強制を拒む教員の大量処分や自衛隊官舎にビラをいれた人々の逮捕、また毎年三万人をこえる自殺者、悪質な差別事件、子どもたちが被害者にも加害者にもなる殺人事件の連続といった近年のニュースは、日本社会が芯から病んでいることの表れではないか。「自己責任」「勝ち組負け組」といった言葉の流行にみられるように人々の社会連帯の意識が失われ、平和や平等への願いが冷笑される空気が充満してきている。

そのような時代状況だからこそ、「戦争と差別のない未来へ」を合い言葉に全国女性史交流の集いが開催される意義は大きい。戦争や差別を肯定し権力者の正統性を示すために書かれる歴史では、女性の経験はとるに足らないことのように忘れられたり、隠されたり、歪曲されたりしてきた。女性が戦争によって受けた傷、差別される苦しみ、家の中・職場・地域でも女性であるがゆえに悔しい思いをしなくてはならなかった女性たちの様々な怒りや悲しみや苦闘は、女性たち一人一人の胸に秘められてきた。日本軍「慰安婦」問題に対するネガティブ・キャンペーンにも表れているように、「胸に秘めておけ」という社会的圧力は今も私たちを取り巻いている。だからこそ、女性史を掘り起こし女性史を書くということは、個人的な記憶として封じ込められていた女性の記憶を集団の記憶として解き放つことであり、女性に沈黙を強いていた社会の抑圧から女性自身が解放されることである。解き放たれた女性の記憶は、人々に真に平和で平等な社会を創る力を与える。